

二項対立と場所の問題 ——アクラム・アイリスリ『石の夢』における主題の分析——

堤 縁華

はじめに

2020年、第二次ナゴルノ・カラバフ紛争が勃発した。戦争は大きく世界を震撼させたが、両国政府公式の非難や威嚇合戦、遺体の蹂躪などの残虐行為、そして民間における先鋭化した敵意と暴力は、決して初めて見られる光景ではなかった。もちろん、戦争は単なる民族的な嫌悪感情の発露ではない。しかし、長らく社会に根付いている民族間の敵意の激しさは、多くの犠牲を伴い再度証明された。

激しい敵対の中、アゼルバイジャンでは「アルメノフォビア（アルメニア人嫌悪）」に異議を呈するような文学や映画作品が存在し、特に近年大きな話題となっている¹。最も代表的なのは、2012年にロシアの『諸民族の友好（Дружба народов）』誌にて公開されたアクラム・アイリスリ（Акрам Айлисли）の『石の夢（Каменные сны）』²である。レクイエム＝小説（роман-реквием）³『石の夢』の主人公はアゼルバイジャン人ムスリムであるが、アルメニア人に対しムスリムが犯した罪の懺悔をするために、アルメニア正教会の総本山・エチミアジン大聖堂へ赴き、修道僧になることを切望する。このようなプロットや、アゼルバイジャンにおけるアルメニア人迫害の描写を含むこの作品は、特にアゼルバイジャン国内で大きな問題となった。高齢の作家は迫害を受け、現在もなお事実上の自宅軟禁下にあり、人権問題にも発展している。

一部アゼルバイジャンやロシア、欧米の文化人などは、『石の夢』を勇敢な政治的メッセージ、高潔な懺悔や謝罪として捉えた。同胞の非を指摘するアイリスリの勇気はパステルナークやパムクのそれに例えられ、イマニユエル・ウォーラーsteinやアンドレイ・ビートフを初めとする文化人によって、2014年度のノーベル平和賞にアイリスリをノミネートする動きが見られた⁴。これらは命の危険を冒し、タブーに触れたアイリスリの行為に対する大きな称賛である一方、「平和賞」へのノミネートは、現状の作品理解が、文学ではなく政治的な次元に重きを置いていることの反映でもある。もちろん、『石の夢』が極めて政治的な文学であることは確かであり、作家本人も『石の夢』が現実世界で持つメッセージ性を認めている⁵。しかし、『石の夢』が文学作品である以上、政治的な議論においても、テキスト分析や文学的な考察による基礎付けが不可欠である。また、文学的な先行研究においても、作品の文学性より政治性に重き

が置かれていることが多いためか、テキストから乖離した読解が散見される。

本稿は、以上の状況を鑑み、テキストを議論の中心に据え、十分になされていない『石の夢』という作品自体についての考察を行う。方法としては、全編を貫き反復されるモチーフや、作品全体の構図をアリュージョン的に表す象徴的な部分を手がかりに、作品の根底をなす主題を考察する。具体的には、『石の夢』で大きく展開される主題であり、『石の夢』の読解に根本的に関わる「劇場性」、及び「真理」という二つの主題を取り上げる。作中で展開される二つの主題を辿ると、まさに『石の夢』という作品自体が、社会での受容や政治性を重んじる先行研究に見られるようなフィクションと現実の混同や、個人の追求をも敵対の枠組みのもと単純化しようとする眼差しを浮き彫りにしていることが明らかになる。そして、現行の作品理解におけるこのような皮肉な状況を越え、さらに二つの主題を掘り下げると、民族対立のアポリアである二項対立と場所の問題を見出すことができる、という作品に関する新しい解釈を提示する。

1. 『石の夢』概説

1.1 アイリスリについて

アクラム・アイリスリは、1937年にアゼルバイジャンのナヒチェヴァン自治共和国に位置する村落ユハリイ・アイリス（Юхары-Айлис）に生まれた。本名はアクラム・ナジャフオグル・ナイボフ（Акрам Наджаф оглы Наибов）であり、「アイリスリ」は故郷にちなんだペンネームである。モスクワのゴーリキー文学大学で学んだアイリスリは、人民作家の称号や、国家勲章「独立」、「榮譽」などを授与されており、アゼルバイジャンの代表的な作家である。『人々と木々（Люди и деревья）』をはじめとするアイリスリの諸作は、複数の言語に翻訳され、ソ連で人気を博していた。彼自身もトゥルゲーネフ、シュクシーン、マルケス、ラシュディなどをアゼルバイジャン語に翻訳している。他にも、出版社勤務時代には、若い作家の抜擢に尽力するなど、アイリスリは様々な面でアゼルバイジャンの文化に貢献してきたと言える。

アイリスリは「60年代人（шестидесятники）」、「農村派（деревенщики）」の一人として理解されることが多い。しかし、アイリスリの作家としての関心や姿勢は、このような認識と一致する部分もあれば、相反する部分もある。戦争の時期と重なる幼年時代の体験は、アイリスリや同世代の作家にとって、創作の重要なテーマであった。アイリスリの作品では、戦時下の農村で、厳しい現実に向かいながらも、誠実さや善良さを追求し続ける人々の姿が描かれている。また、彼の作品では、過去や故郷が極めて重要視されている。文学研究者グリエフは、過去や故郷との繋がりを大切にすることや、善良さや誠実さへの道徳的な追求などをアイリスリの初期の作品の核心として挙げている⁷。このような傾向は、アイリスリの属する世代の特徴を

反映しており、農村派的なテーマとも近い一方、時にはナショナリズムや排他主義と繋がりがねない農村派作家の傾向が、アイリスリの多民族共存についての信念に反することは明白である⁸。

1.2 出版をめぐる

ロシアの『諸民族の友好』誌 2012 年 12 月号にて、アイリスリ本人による露訳版の『石の夢』が公開された。2006–2007 年頃に書かれたオリジナルはアゼルバイジャン語のものであった。当初アイリスリに出版する意図はなかったが、2012 年 8 月のラミル・サファロフ送還時に見られたアルメノフォビアの高揚が、12 月の作品発表を動機付けたと見られている^{9,10}。

『石の夢』出版後、アイリスリは政府による迫害、宗教勢力の非難、そして民間での抗議を受けた。2013 年 2 月、アイリスリはイルハム・アリエフ大統領により人民作家の称号と栄誉年金を剥奪され¹¹、カフカース・ムスリム宗務局による非難の的ともなった¹²。民間では、アイリスリの写真や本を燃やすデモが、アイリスリの故郷アイリスを含む各地で行われた。アイリスリがアルメニア人かどうか確かめるための DNA 調査を求める国会議員や、彼の耳に懸賞金をかける政治家もいた。現在、アイリスリは事実上の自宅軟禁状態にあり、迫害は彼の家族にも及んでいる¹³。

一方、先述したノーベル賞ノミネートをはじめ、アイリスリを声援する動きも見られた。2018 年、『イエメン (Йемен)』、『石の夢』、『大いなる渋滞 (Грандиозная пробка)』の英訳が『さよなら、アイリス：非-伝統的小説三部作』として出版された¹⁴。作者書き下ろしのあとがきや、『石の夢』事件の概説などを含むこの英訳本の出版によって世界中で広く問題意識を喚起することが期待できるが、アイリスリの処遇は未だ改善されていない。

このように、『石の夢』は様々な問題を巻き起こした。以下、『石の夢』の概要を確認する。

1.3 『石の夢』の概要

『石の夢』は複雑なプロットを持つが、あえて最も中心的なストーリーをまとめるとすると、以下ようになる。

主人公のサドゥグリュイは、政権に対し批判的な態度を抱く名俳優である。彼の故郷アイリスには、かつて多くのアルメニア人が住んでいた。アイリスは石に覆われた村落であり、そこには 12 の教会遺跡がある。サドゥグリュイは教会の丸屋根から降り注ぐ神秘的な光を忘れられずにいた。

サドゥグリュイは、同じくアイリス出身であり、義父でもあるアバサリエフ医師に、アイリス

や、そこで偉大な文明を築いたアルメニア人の素晴らしさを教えられた。そのため彼はアイリスという場所や、そこに住むアルメニア人に好感を抱いていた。もっとも、オスマントルコによる大虐殺が原因で、その人数は限られていた。住民から虐殺の恐ろしさについて聞かされたサドゥグレイにとって、アイリスとは最も素晴らしい場所であり、また同時に悲劇の影を帯びた場所でもあった。

ストーリーは主に 1989 年の 12 月から 1990 年の始まりにかけて、バクーで起こる¹⁵。ペレストロイカ以降の民族対立により高揚した国内のアルメノフォビアは、サドゥグレイにとって耐え難いものであった。彼は「まるで自分の中にアルメニア人が隠れて存在し」、アルメニア人が痛めつけられるたび、彼自身も同じように痛みを感じるような気すらする。アゼルバイジャン人によるアルメニア人迫害の罪悪感に苛まれる彼はふさぎこみ、エチミアジンで修道僧となり、ムスリムの犯した罪に対し、神の赦しを乞いたいと熱望する。仕事をやめ、アイリスの夢を何度も見る彼の様を、人々は狂気として捉えた。

1989 年の 12 月末、サドゥグレイはアゼルバイジャン人に襲われているアルメニア人を庇って暴力を振るわれ、意識不明の重体で病院に運ばれる。彼は幻覚の中で、アイリスの石の世界を彷徨い、山頂にある教会を目指し、幼少期に見た子狐を追いかけ続ける。

1990 年の 1 月 12 日、サドゥグレイは病院で命を落とす。その日、バクーではナショナリストが教会を燃やし始め、バクーボグロムが始まろうとしていた。

以上、前後関係に沿って、主人公を中心に『石の夢』の梗概を示したが、実際は複数の人物や時空が交差する形で物語が展開されている。詳述は別の機会に譲り、ここではまず以上のプロットを中心とする『石の夢』に対する批判の内容を確認する。

1.4 『石の夢』に対する批判

『石の夢』が問題となった原因は、エチミアジンへ行く願望や割礼に対する批判などの宗教的な理由もあるが、なによりもアルメニア人による虐殺を描かず、アゼルバイジャン側の加害のみを描いたことにある¹⁶。アゼルバイジャン社会のタブーに触れたアイリスリは、アルメニア側から賄賂を受け取って、敵陣営へ寝返った民族の裏切り者であると批判された¹⁷。

『石の夢』の反響は大衆の心情を反映している一方、作品の十分な理解に基づいているとはいえない。次節では、先行研究における『石の夢』の理解を確認する。

1.5 先行研究とその限界

『石の夢』についての先行研究や批評は限られており、それらは政治・社会学的なものと文学

的なものに大別できる。前者は『コーカサス・サーベイ (Caucasus Survey)』誌の特集に代表され¹⁸、後者に関しては、ワッチェル¹⁹、オルテ²⁰、アンニンスキー²¹、ペトロシアン²²の研究や評論などが挙げられる。どのような切り口からなされている研究においても、共通して文学性より政治性を重視する傾向や、適切なテキスト分析の不足が見られる。

『コーカサス・サーベイ』誌の特集では、『石の夢』のアゼルバイジャンにおける反響、アルメニアでの受容、そして作家のインタビューなど、基礎的な情報や論考が提示されている。文学的な面に関しては、マメドフが他の作家による類似作品を紹介し、イスマイリがアイリスリの『諸民族の友好』誌での論争に言及している。『石の夢』研究の基礎文献としての重要性は疑いようのないものであるが、作品の反響など外部的な事象に関する論考が充実している分、作品自体の分析は限られている。

文学的な先行研究に関しては、まずワッチェルによる英訳本の巻末解説が重要である。スラヴ文学・文化を学際的に研究しているワッチェルは、『さよなら、アイリス』三部作を「小さな人間」というロシア/ソビエト文学の伝統の中に位置づけながらも、独裁者の心理描写などに作品のオリジナリティを見出している。このように作品の強度はある程度認められてはいるが、「彼[アイリスリ]の創作が偏向的で理念主導であることに疑いない一方、作品があからさまな宣伝パンフレットであるようにほとんど感じられないことを保証できる分には十分に文学的である」²³などと評価されていることから、その理解の根底において、やはり作品の文学性は政治に付随したものに過ぎないとされているように考えられる。

文学研究者オルテは、「世界文学」に対する批判に『石の夢』が当てはまらないことを示し、ドゥルーズ＝ガタリの「マイナー文学」として『石の夢』を読みかえることを試みた。その意欲的な試みは魅力的である一方、『石の夢』の分析においてはしばしば作者と登場人物の過度な同一視²⁴、作品世界と現実世界の等置による深読み²⁵などが見られる。また、作品を広く紹介する目的からか、『石の夢』の内容のパラフレーズが論の大半を構成している。

作品紹介に重きを置いている点は、アンニンスキーの評論も同様である。アンニンスキーの評論では、誠実さの問題が作品の中心に見出されていることが、先に提示したグリエフの見解と一致している。また、半分が自作の小説であるペトロシアンの論文は、『石の夢』に対するアルメニアからの応答の試みとしては稀有であるが、参照価値の高い厳密に学術的な論文であるとは言い難い。

『石の夢』の文学的な先行研究は、それぞれ興味深い切り口を示す一方、作品自体の理解にどれほど貢献しているか疑問が残る。研究の浅い作品をすぐさま文学的な伝統から理解しようとすることは、幾分か作品を型に押し込む恐れがある上、その際援用されている文学的な概念も、

『石の夢』の理解に必要不可欠であるとは必ずしも言えない。また、オルテに限らず、程度は違えど多くの研究に共通して、作品世界と現実世界を過度に同一視する傾向が見られる。テキストから逸脱した読解の原因となるこの傾向は、作品の政治性が文学性をはるかに凌駕するという見方に起因すると考えられる。

もちろん、『石の夢』を完全にその政治的な側面や、外部的な諸事実と切り離して考察するのはナンセンスに他ならない。しかし、『石の夢』の根源的な特徴の一つが、それが政治的であると同時に文学的な創作であることである以上、作品を単なるイデオロギー装置に還元することは許されない。政治的な観点から『石の夢』を考察することには何の問題もないが、その際政治性のみが『石の夢』の機能であり、その作品世界は現実世界と一対一対応すると仮定し、テキストから離れた読みを提示することには問題がある。本稿は、政治的、社会的背景を踏まえた上で、テキストに忠実な読解を行い、政治的メッセージと文学的探求が錯綜する『石の夢』のより十全な理解を目指す。

2. 『石の夢』分析：主題1「劇場性」

『石の夢』の主題と呼べるものは複数あるが、中でも「劇場性」の主題はどれにも先立って展開され、その後も異なる次元で問われ続け、深いレベルまで極められていく。この主題は、アイリスリ作品において一貫して探求される「嘘と真実」の問題や、『石の夢』という作品が現実で突きつけられている「フィクションと現実」の問題と大きく関わるものである。

『石の夢』は「誠実に」「正しい」歴史を語っているか、敵対の「現実」にどう向き合っているか。あるいは『石の夢』はどのような「目的」をもっているのか。『石の夢』につきまとうレトリックの多くは、このような次元で展開されている。そして、社会の受容においても、一部の先行研究においても、その答えは往々にしてテキストの外部に求められており、憶測と飛躍に満ちている。本節では、『石の夢』のテキスト自体に、「嘘と真実」、「フィクションと現実」についての深い思索が見られることを明らかにする。

2.1 「劇場性」

『石の夢』は、二重の意味で劇場から離れられない物語である。まず、表層的な意味において、作品には劇場にまつわる要素がふんだんに含まれている。名俳優である主人公に始まり、劇場支配人・モーパッサンや、喜劇俳優・カラバフルイなど、主要人物の多くを劇場関係者が占めている。さらに第三章のように、劇場が直接舞台となることもある。これらの要素は、表層的なイメージにおいて、繰り返し「劇場性」という主題への注意を促す。では、散りばめら

れた諸要素はどこへ繋がっていくのか。「劇場性」のより大きな展開を考察する手始めとして、最適なのは冒頭の部分である。

一般的に作品の冒頭は、作品の印象に決定的な影響を及ぼし、その後の展開の理解を左右する部分である。そのような重要な部分で、「劇場性」が強調されていることは、それが重要なだけでなく、全編を貫く世界観であることも示唆している。以下、その詳細を確認する。

『石の夢』は、主人公サドゥグレイが重体で搬送される緊張感に満ちた場面から始まるが、そこには場面の調和を大きく乱す人物がいる。その人物とは、主人公を病院まで運んだ喜劇俳優のカラバフルイである。彼についての描写は以下の通りである。

もしもこのような病院の日常では見慣れた情景に、何か際立った、そして場違いに感じられるものがあるとすれば、それは病院へ患者を運んできた人物の風貌や振る舞いにおける悲劇的なコミカルさであろう。この齢五十五から六十ほどの、どうしてもその大きな丸い腹と調和しない小さな顔を持つせわしない男は、同じ言葉を何度も繰り返しながら、医者の周りをくるくる走り回っていた […]」²⁶（下線は筆者による。以下同。）

主人公を心配するカラバフルイ本人はいたって真剣であるが、喜劇俳優である彼は、意図せず「悲劇的なコミカルさ」を醸し出してしまう。『石の夢』全編を通して、演技をしていない日常生活においても、彼は喜劇役者の印象を拭いきれない。彼は攻撃的で傍若無人な隣人に悩まされ、追い詰められた結果護身用のピストルを求めることを決意し、複数の知人に相談するが、「彼を見ただけで笑うことに慣れてしまった人々を相手に、彼の頼みは笑い以外何も引き起こさなかった」²⁷。また、看護婦・ムナツヴェルは、「病床のそばに立つ彼の悲劇的なポーズが、死者の哀悼を想起させるため」²⁸、彼がサドゥグレイを見舞いに来るのを嫌った。カラバフルイは、本人に演じているつもりはなくとも、絶えず「芝居」を想起させ、彼の存在によって、現実と舞台の境界線は、前景化されると同時に無化されるのである。

現実と舞台の境界線を考えさせる「劇場性」の主題は、カラバフルイという人物によって提起され、第三章でさらに大きく展開される。第三章の要は、主人公サドゥグレイと劇場支配人の政治についての議論である。『石の夢』が描く当時のアゼルバイジャンでは、ナショナリズムが高揚し、アルメノフォビアの先鋭化が見られ、国の「元主人 (Бывший Хозяин)」²⁹ への批判が流行した。サドゥグレイは「元主人」の在任中、誰よりもその政権への批判を隠さなかったが、「彼 [[元主人]] に顔を唾を吐かれて馬鹿にされていた奴らが、まだその唾も乾かないうちに、既に列をなして新しい『親分 (Первый)』のケツを舐めようとしている」³⁰ のを目の当たり

にし、強い反感を抱く。

そのような中、国の「元主人」を批判する「新しい劇」が、サドゥグレイを主演と想定した上で書かれる。当然、彼は出演をかたく拒否する。このことが、政権交代に伴い新しく「上演」されるべき政治的な「物語」への参加拒否を表すのは明確である。このように、「劇場性」は政治的な文脈でより深く展開される。

政治的「上演」の影は、しかし、その「脚本」を嫌悪する反対派にまで及ぶ。サドゥグレイは「元主人」任期中の自分にある種の「役割」を認めている。

俺が国に飼い慣らされたような幸福や、安っぽい栄誉を得ることを彼「元主人」は禁じたんだ。彼は俺が彼自身に対し反乱を起こすようにけしかけた。そして俺はこの悪意のない悲喜劇の中で、彼に割り当てられたこの役が気に入っていた。なんたって俺は、自分の内に自由の感覚を保つには、定期的に政府との関係を陰悪にしなければならないと常思っていたからな。この意味では、俺は彼を代父とだってみなせるさ。³¹

つまり、権力の「上演」に挑戦し、その瓦解を目指す者ですら脚本に組み込まれており、「出演拒否」はもはや不可能なのである。

全てを呑み込む「劇場」は、さらに、自分が「役者」であることをメタ的に認識する瞬間それ自体までも、そのネットワークの中に組み込んでしまう。劇場支配人・モーパッサンとの政治的議論が白熱すると、サドゥグレイは「まるで舞台の上で、最後列の観客まで届くよう情熱的に」³² 語った。さらに、聞き手側までもがこのように描写される。

割れるような拍手喝采とともに舞台から発されたサダイ・サドゥグレイのモノローグを何十と暗唱できるモーパッサン・ミララモフは、熟練の観劇者として、取りつかれたようにこのモノローグに聞き入った。³³

「劇場性」を察知する「外」からであるはずの眼差しそのものさえ「上演」される。「劇場」という空間は無限に広がり、「劇場外」という場所は存在し得ないのである。

最終的に「劇場性」は内省のみならず、憧れや幻想までもを侵食する。サドゥグレイは劇場支配人との会話後、夢想し続けていたエチミアジン大聖堂の聖なる祭壇までもが、「彼らの劇場の舞台と同じように鬱々としたもの」³⁴ であると感じる。

ここまでの議論を総括すると、「劇場性」は『石の夢』の中で多層的な展開を見せていると言

える。まず最初に、冒頭から喜劇役者の特徴を強調することによって、現実には「演技」が潜む可能性、あるいはそもそも「現実」と「劇場」が不可分であるという可能性が示唆される。次に、政治という「芝居」を例として、「出演拒否」の不可能性が描かれる。さらに、メタ的に自身の「役割」を認識すること自体が「上演」され、憧れや幻想までもが「劇場性」から逃れられないものとして表される。「劇場」の無限に近い広がり、そこからの逃げ場のなさは、このように作品を通して強調されているのである。

2.2 「劇場性」の意義

周知の通り、「劇場性」に関する議論は、「世界は舞台」などという耳慣れた比喻だけでなく、パフォーマンス的に人間社会の諸活動を捉えたドラマトゥルギー（ゴッフマン）や劇場国家論（ギアツ）などの社会学的な流れにまで至っている。吉見俊哉は、バーク、ゴッフマン、ターナーから、バランディエや山口昌男などに至るこの理論体系を、「上演論的パースペクティヴ」としてまとめ、その都市論の基礎としている³⁵。このような理解は、『石の夢』で展開される「劇場性」の主題と呼応しており、人物たちが暮らす首都バクーは、まさにそのような劇場的な都市として理解できる。

まず、このような「都市＝上演」において、「[...]」諸々の装置は都市を舞台／客席として重層的に構成しており、その幾重にも折り重なった上演の場、〈劇場〉の重なりあう編制のなかで、人びとは、時には〈観客 audience〉として、時には〈演者 performer〉として、自らを演じているのである³⁶。サドゥグレイが、政治における自身の「役割」を眼差すこと自体をまた演じることや、サドゥグレイのモノローグに聞き入る劇場支配人が観客を演じるのは、まさにこの「演者／観客」の循環的な関係を表している。

さらに、「上演論的パースペクティヴ」において最も重要なのは、「一方に上演される『虚構の』世界があり、他方に上演されない『現実の』世界があるわけではなく、現実の世界はそれ自体、常に上演を通して演劇的に構成されている³⁷」ということである。このことは、カラバフルイという、実生活が「演技」として捉えられる存在によって冒頭から示唆され、さらにどの次元においても「劇場」から逃れられないサドゥグレイによって明確に示されている。

「[...]」『演技』とはしばしば『偽りの自己』の呈示であるかのように思われているが、その際、隠蔽された自己が呈示された自己よりも『真である』と主張することはできないのであって、むしろ、ある自己が『真』か『偽』かは、それが置かれるパフォーマンスの社会的文脈のなかで決定されるのだ³⁸。「劇場性」と「真偽」の関係は、もはやこの一文を引用するまでもないほど自明であるが、「真偽」の問題や誠実さの探求は、まさにアイリスリの多くの作品に共

通して見られる特徴である³⁹。

アイリスリの多くの作品には、「嘘と真実」の問題への関心が見られる。近年の作品で言えば、『イエメン』の主人公は、事実無根の非難を受け、人生を嘘に大きく左右される。『大いなる渋滞』の舞台はアゼルバイジャンを彷彿させる仮想国家「アラハバード」であり、その国家元首や官僚の嘘にまみれた日常が物語の中心である。『諸民族の友好』誌 2015 年 12 月号で公開された『アヤメが生えていないところ』の主人公は、正直者のマメドフと嘘つきのジャファルという対照的な二人である。

これらの作品からなる一連の流れの中で、『石の夢』における「劇場性」の主題は、「嘘と真実」の問題系に対する独特なアプローチであると言える。なぜなら、前述の通り、「劇場」において絶対的な「嘘と真実」はないからである。もちろん、『石の夢』において「嘘と真実」が徹底的に不在であるというわけではない。例えば、明確に嘘を批判するような以下の一文も存在する。「恐ろしいじゃないか、マポーシュ、自分の身を顧みず、民族に真実を伝えられる精神的な権威が、国全体に一人もいなかったなんて」⁴⁰。時には明確に、時にはアイロニックに表されるも、一貫して嘘や偽りに対し批判的である姿勢は、『石の夢』においても他の作品と同様であると言える。

では、「劇場性」という「嘘と真実」のない次元が提示されたのは何故か。根底において真実を求める姿勢は他の作品と同様でありながら、何故あえて「嘘と真実」の判断に留保を持たせようとする主題を提示したのか。それは、「嘘と真実」の問題と隣接したかたちで、「フィクションと現実」というもう一つの問題が提起されているからであると考えられる。例えば、先に引用した病院での冒頭部分は、悲劇に浸るよう描くこともできたであろう。にもかかわらず、常に「演技」をしていると捉えられる喜劇俳優・カラバフリュイに焦点を当て、どこか冷たい目で「コミカルさ」を指摘する語りは、カラバフリュイのみならず、厳粛な医師や重病人、さらには主人公とその悲劇まで、『石の夢』全体が「演出」されているに過ぎないことをほのめかしているのではないか。このことは、予想されてのことかどうか定かではないが、結果として『石の夢』を取り巻く言説や現象について多くを語っている。

『石の夢』という作品ほど、「嘘だ」という、文学作品に対して必ずしも適切であるとは言い難い非難を浴びせられたものはないだろう。研究においても、『石の夢』の読解は往々にして現実の事件や作者本人と作品内容の同一視を前提に進められている。しかし、そもそも『石の夢』に現実の事件や作者自身と一対一対応する必要性や、ましてや公平さに配慮しながら「正しい」ナラティブを提供する義務はあっただろうか。『石の夢』は確かに現実を起こっている出来事や人々と関係があり、フィクションであることはその関係性を無化するわけではない。しかし、

『石の夢』がフィクションであるという自明の事実が、「劇場性」の主題によって繰り返し強調されるにもかかわらず、全く忘却されているのは問題である。

このようにフィクションと現実の混同を浮き彫りにする『石の夢』であるが、さらに突き詰めると、フィクションの問題を提起するまでもなく、そもそも「真実」というものの自体、ある程度は社会的文脈の中で決められている。このことは、真相をもはや求められず、各々が自身の思う「真実」を叫んでいる民族紛争の文脈においてはとりわけ顕著である。たとえ意見が一致し、一つの「真実」が完成したところで、個々人がそれについて語る際もまた「上演」となり、異なる様相を呈す。あらゆる言説は、多くのナラティヴのうちの一つを自分なりに「上演」したものに過ぎないのである。

『石の夢』における「劇場性」の主題は、以上に提示した思索が可能になるような示唆に富んでいる。そして、そのような作品が、絶えず真偽の次元で評価され、批判されている。これほど強くフィクションであることを強調する『石の夢』に、まだ何らかの「現実」を暴露するような側面があるのなら、それはまさに盲目的な敵対心、あるいは過度に政治的な文学作品の読解によって、基礎的な事象の分別がつかなくなっているこの状況ではないか。

総括すると、まずアイリスリの諸作品で議論される「嘘と真実」の問題に対し、「嘘と真実」を問わせない「劇場」という場所が提供される点において、『石の夢』はアイリスリの作品の中でも文学的な特殊性があると言える。「劇場性」の主題はさらに、「嘘と真実」や「フィクションと現実」にまつわる諸問題の混同を予期したかのように、『石の夢』自体が「上演」されていることに、絶えず注意を促している。

一方、「劇場性」の主題が主に展開されるバクーと対照的なトボスとして、サドゥグリの故郷アイリスは、「真偽」を越えた「真理」の次元を提示する。次節では、そのような「真理」の主題を考察する。

3. 『石の夢』分析：主題2「真理」

3.1 神秘主義的探求

『石の夢』の根幹にあるもう一つの主題は「真理」である。以下、「真理」が、なぜ『石の夢』の根底をなす主題であるかを示す。

「真理」の議論に先だって確認する必要があるのは、狂気が『石の夢』の物語を動かす重大な機能を持つことである。狂気の表象は作中で複数見られるが、ここではまず、構造的に重要な役割を果たしているサドゥグリの狂気に注目する。サドゥグリの妻・アザダから見ると、サドゥグリはアルメニア人に異常に執着している。彼は仕事にも行かず、日々アルメニア行

きの列車を眺めるため駅で茫然とするなどの奇行に走り、もはや狂人の様を呈している。サドゥグリの良き理解者であるアバサリエフ医師ですら、複数の精神病名を挙げ、彼に診断を下した。

サドゥグリの狂気とされているものが、アルメニア人との「異常」な関係性であるのなら、『石の夢』のプロットはサドゥグリの狂気によって動かされていると言っても過言ではない。狂気の問題系はまた一つの重要な主題となり得るが、ここでは表層的に狂気に見えるものが、その深層において「真理」の探求であることが作中でほのめかされていることに注目し、それが作品の根源的な理解に繋がることを示す。

狂気と「真理」の繋がりが示されるのは、「ライラとマジヌーン」の物語への言及においてである。サドゥグリのエチミアジンに行きたいという願望を聞き、ただでさえその精神状態を心配していた彼の妻は、自身の父であるアバサリエフ医師に相談する。するとアバサリエフ医師は、彼の狂気を以下のように説明する。

[...]そして問題は、今のアルメニア人がどうなったかではなく、今の我々がどういう人間か、ということにあるのだ。サダイ[・サドゥグリ]が気にしてるのはどんなアルメニア人でもない。彼は僕らの民族のことだけを考えているんだ。[...]君も読んだじゃないか、娘よ、『ライラとマジヌーン』を。思い出せ、マジヌーンの部族の軍が、ライラの父の部族の軍に対し最後の襲撃に出たとき、彼が何をやらしたか。そもそも戦争は、娘を他の部族出身の者に嫁がせたくない残酷なライラの父をこらしめるために始まったのだからな。でもライラへの愛で盲目なマジヌーンは、彼女の父を憐れみ、もっとも重要な瞬間に敵軍の助けに身を投じた。何故ならこれこそが本当の愛というものだからだ。本当の愛はいかなる境界も知らない。女性も、祖国(Родина)もそのように愛することができる。その愛は澄み切った鏡だ、娘よ。そこには善と慈悲しか映らない。その愛は生からではなく、神からのものなのだ。それこそが彼[サドゥグリ]——我らがマジヌーン——の病だよ。[...]⁴¹

このように、サドゥグリの狂気は、完全にマジヌーンのそれと重ねられているのである。ここでまず、マジヌーンの狂気の性質を確認する。

周知の通り、「ライラとマジヌーン」は、少女ライラと、彼女に対する強烈な愛のため「マジヌーン(狂人)」と呼ばれる少年カイスを中心とした悲恋物語である。この物語はアラブを舞台としているが、伝説、民謡、神秘主義詩など様々な形で中東近辺各地に広く伝わった⁴²。オ

ルテはここで言及される「ライラとマジヌーン」の物語を、名高いニザーミーのハムセ第三作『ライラとマジヌーン』として捉えている⁴³。しかし、上記に引用したような部族間対立が強調されたプロットは、アゼルバイジャンにおいて重要な位置を占めるニザーミーやフズリー、あるいはアラブ側の物語でもなく、ジャーミーのバージョンに近いとも考えられる。もっとも、多くのバリエーションを持つ「ライラとマジヌーン」がどの作品かをこの短い言及から厳密に特定することは難しい。しかし、ニザーミーであれ、ジャーミーであれ、両者ともイスラーム神秘主義と縁深い人物であり、このことは『石の夢』におけるサドゥグリュイの狂気を読み解く上で大きな手掛かりになる。

アゼルバイジャンと関係の深いペルシアやトルコにおいて、「ライラとマジヌーン」の物語は特にイスラーム神秘主義と緊密な関係にある⁴⁴。井筒俊彦によると、マジヌーンの物語はイスラーム神秘主義の実践におけるエロスの道、愛の道を体現している。そこで核心的なのは、「我」と「汝(=神)」の区別の無化、すなわち「神秘主義的合一」の境地を目指すことである⁴⁵。つまり、マジヌーンのライラと結ばれたいという強い願望は、神と渾然一体になる願望とパラレルであり、マジヌーンの狂気は、神との神秘主義的合一を目指す修道僧の、理性を越えた状態の恋愛的な比喩である。

『石の夢』のコンテクストに引き戻してみると、「ライラとマジヌーン」への言及は、単に愛の強さを強調しているのではなく、狂気とみなされているものの実態が、他者には理解し得ぬ神や真理への探求であるということをほのめかしていると考えられる。ここで探求される対象は、言うまでもなく、前節で問題となった「嘘と真実」などの「真偽」の問題とは異なる次元にある絶対的、超越的なものである。このような追求は、絶対的な神(Бог)に対する呼びかけが『石の夢』で反復されることにも表れている。それに対し出現回数が限られているのは絶対的な「真理(Истина)」という言葉であるが、その出現箇所は示唆に富んでいる。例えば以下の一文である。

お前の神秘は理解し難い、主よ——これらの言葉は、「真理」の威光、理解し難いアイリス自体(Его Истинное Величество, сам непостижимый Айлис)によって発されなかっただろうか。「アルメニア人は常に自分の神と仲睦まじい。」⁴⁶

サドゥグリュイが、友人の口から出た言葉に衝撃を受け、その言葉が誰によって発されたのかを考える時の一文である。注目すべきなのは、ここではアイリス自体が神の神秘、「真理」の威光と等置されていることである。もう一つの「真理」に関する言及は、以下の通りである。

一言で言うと、アバサリエフ医師の話から分かったのは、アイリスこそ神の 1001 の名の一つであることである。そして、彼のアイリスへの愛は、アルメニア人とも、ムスリムとも関係がないのかもしれない。それはむしろ、人間の「真理」(Истина) への忠誠の、また一つの独特な、そして真に崇高な発露である。⁴⁷

アバサリエフ医師がサドゥグレイを導き、アイリスの真の価値を伝える箇所の一文である。この引用において「真理」という言葉は、一つ目の例同様、アイリスと同時に言及される。アイリスは神の神秘同様、理解し難く、「真理」の威光であり、「アイリスへの愛」は「人間の『真理』への忠誠」の発露であるとされる。このように、「真理」はアイリスによって体現されるのである。

他にも、アイリスが真理や神の追求に関して特権的なトポスであることを示す例は枚挙にいとまがない。例えば、第二章の章題はこのようなものである。「嗚呼全能の主よ、お願いだ、教えておくれ、お前が我がアイリスを生んだのか、我がアイリスがお前を生んだのか…?」⁴⁸ このように、アイリスと神は循環的な関係にある。

このような事実を確認した上で、先の「ライラとマジヌーン」に関する言及に戻ると、サドゥグレイの神秘主義的な「真理」の追求の全貌が明らかになる。アバサリエフ医師は、「女性も、祖国(Родина)もそのように愛せる」と言うが、「祖国」という語だけでは、サドゥグレイの追求を完全に言い表せているとは言い難い。何故なら、サドゥグレイの祖国や民族への愛は、その原初体験である故郷(родина)に基づいており、「真理」は常にアイリスによって体現されるからである。この異常な故郷愛こそがサドゥグレイの狂気であり、あえて言うなら、「祖国(Родина)」と「故郷(родина)」の他、ここには「大文字の故郷」という特殊な次元が存在する。故郷の重要な役割は、アイリスの初期の作品から、人間は生まれ故郷、その場所や記憶との繋がりがなしには今も未来もないという主張を見出すグリエフの見解とも一致する⁴⁹。

3.2 真理と場所

人間は生まれ育った土地と断絶したまま真理にたどり着けない。農村派文学などにもよく見られる、一見馴染みの良いこのレトリックには、実は相反する概念が併存しているのではない。『石の夢』における「真理」が、神に関わる超越的なものであることはすでに確認したとおりであるが、故郷ほど非超越的なものはない。サドゥグレイの熱狂的な故郷への愛が「真理」の追求であるとなると、トポフィリア(トゥアン)が常に情緒的、経験的な要素と結びついている以上、その「真理」の超越性には問題が生じると考えられる。

『石の夢』で展開される「真理」は、原初的には超越的であるが、実際の展開において個人的な形をとっている。それはいわば個人的、局地的な真理という、矛盾をはらむものである。つまり、「真理 (Истина)」の大文字が強調する絶対性は、個人にとっての絶対性であると捉えられる。

故郷によって体現される個人的な「真理」の探求の物語として『石の夢』を理解すると、批判者が投げつけるものも含め、『石の夢』の多くの疑問点が解決される。例えば、サドゥグレイの狂気は、「自我 (アゼルバイジャン人)」と「敵 = 他者 (アルメニア人)」の混同として捉えられているが、それは正確ではない。『石の夢』において重要なのは、アルメニア人のアイリスではなく、アイリスのアルメニア人なのである。彼はアイリスで女神の石像の神秘的な奇跡を目にした時、思わず十字を切り、「アルメニア人のように十字を切っているぞ!」⁵⁰ と他人に冷やかされたこともあった。しかし、サドゥグレイは一度も自分をアルメニア人として見たことがない。まさにアイリスの中にアルメニア人がいるように、彼の「中に」⁵¹ アルメニア人がいると感じているのである。

つまり、『石の夢』で問題となったアルメニア人への愛や賞賛は、あくまで真理の場所アイリスの建設者、居住者、代表者としてのアルメニア人に向けられたものである。アイリスの特権性が先にあるからこそ、アルメニア人への執着に見える数々は実は先の引用のとおり、原初的には「アルメニア人とも、ムスリムとも関係がない」のである。

3.3 「真理」の追求の失敗

さらに注目すべきなのは、たとえそれが個人的なものであっても、『石の夢』はあくまで「真理」の追求についての物語である、という点である。幻想の中で目指した教会や、追いかけてきた子狐に届かぬまま主人公に死が訪れることなどに示されるように、「真理」の追求が叶うことはない。そしてその理由こそが、「アイリス = 真理」においては排除されたはずのアゼルバイジャンとアルメニアの二項対立なのである。

政治的変動と高揚するアルメノフォビアの中、モーパッサンが「今じゃ街の愚民どもはアルメニア人を悪く言う奴の言うことしか聞かない」⁵² と形容するような社会が形成される。サドゥグレイの個人的な「真理」は、それがアルメニア人と結びついてしまっているため、許容されなくなる。アルメニア文化の影響を受けているアイリスや、そこに住むアルメニア人を称賛する彼は非難され、ついに彼もがそのような対立に惑わされてしまう。

大主教直々の祝福を受け、キリスト教を信仰し、修道僧として永遠にエチミアジンに留

まり、ムスリムがアルメニア人対し犯した罪を神が赦すよう祈るため、エチミアジンに赴く願望は、スムガイト事件後のある晩、突然サダイ・サドゥグルイの魂に出現した。⁵³

スムガイト事件は、ペレストロイカ後初の大規模虐殺であり、アルメノフォビアの噴出点である。まさにこの事件を契機に、サドゥグルイがアイリスの教会ではなく、アイリスのある教会が酷似する⁵⁴ものに過ぎないエチミアジンへ行く願望を抱き始める。しかし、そのような追求は彼の「真理」の道筋から外れている。現に、同じくアイリスの強烈な信奉者であるアバサリエフ医師は幾度かエチミアジンを訪れたが、歳を取ってから、本当の神の家はアイリスであり、アイリスと比べたらエチミアジンは鼻垂れ小僧でしかないと理解したと主張する⁵⁵。自身の追求する真理の道筋から外れてしまったサドゥグルイは、ついに幻覚の中のアイリスで目指し続けていた教会や追いかけていた子狐に届くことなく命を落とす。これらのモチーフは、言うまでもなく真理の追求と失敗の動態的な象徴として理解できる。さらに、サドゥグルイの死と同時に、バクーボグロムが始まろうとしている。このように、民族嫌悪の高揚は、「真理」の追求者の死と等置されているのである。

元来民族と関係のない「真理」の追求が盲目的な民族嫌悪に阻害される。『石の夢』で問題視されているのは、アルメノフォビアという現象自体だけでなく、それが個人的な「真理」の追求を阻害するという点であると考えられる。一方、その批判は絶対的な「真理」を断定し、超越者の視点でなされるわけではない。その真理は、あくまで個人的な経験に基づいて見出されたものであることも、作品が絶えず念押ししている。先に確認した通り、「真理＝アイリス」は原初的には確かに民族とは関係ないながらも、アゼルバイジャン人とアルメニア人が構築した歴史と分離できない「場所」という性質を持つからである。

4. 二項対立と場所の問題

ここまで、『石の夢』の根本的な理解に関わる「劇場性」、及び「真理」の二つの主題について個別に論じてきた。ここで強調したいのは、二つの主題は共通して、絡み合う二項対立と場所の問題を内包しているということである。

まず、双方の主題には二項対立を超克する試みが存在する。第一の主題では、「舞台と現実」という潜在的な二項対立を無化する「劇場性」が提示される。そして、際限なく広がる「劇場」において、「嘘と真実」という二項対立もまた成立不可能になる。第二の「真理」の主題では、まず、「ライラとマジヌーン」の物語を通して、二項対立の超克を目指すアプローチである「神秘的合一」が提示される。民族的な枠組みに囚われない超越的な「真理」との「神秘的合

一」を目指す姿勢は、最終的には失敗するものの、民族対立が生み出した「敵/味方」の二項対立的なメンタリティに対する抵抗として捉えられる。

両主題における二項対立の超克は、共に概念としては超越的で普遍的なものである一方、実際の展開においては、常に場所の持つ限定性に制限される。「劇場性」の主題に関して言えば、「劇場」は際限なく広がっているようで、実際は主に劇場的な都市として描かれるバクーにおいて展開される。バクーと対照的に現れるアイリスは、真理と同義である特権的な場所であるため、「劇場性」とは正反対の絶対性が強調される。言い換えれば、「劇場性」の概念は「劇場」でない場所はないという前提を持つが、アイリスは、まさにその「劇場」の外にある絶対的な場所として機能し得るのである。「真理」の主題に関しては、「真理」は原初的には超越的であるが、それが故郷と等置されることによって、再び場所の持つ限定性という縛りに直面する。どちらの主題においても、二項対立を超克するための有効な手段が提示される一方、それは場所の持つ限定性という壁にぶち当たっている。

二項対立と場所の問題が、民族対立の文脈で極めてアクチュアルであることは明らかである。『石の夢』におけるこの二つの問題の衝突は、決して偶然ではないように考えられる。場所が物理的に限定的で、人や社会にとって重要な意味を持つため、時に政治的になり得ることは、『石の夢』においても自覚的に表されている。例えば、サドゥグルイの幼なじみ・ババシュは、アルメノフォビアを発露する際、似非語源学的アプローチによって、アルメニア人によるアイリス「入植」を主張した。彼によると、アイリスとは本来「入植地」の意味であり、他のアルメニア語の響きを持つ地名も、後から改竄されたものに過ぎない⁵⁶。土地は有限だからこそ、政治的な争いの的になる。このことは、『石の夢』においても明確に認識されているのである。

では、二項対立と場所の衝突があえて提示されていることをどう理解するべきか。そもそも、純粹に超越的なものほど、民族対立の場面において無力なものはない。二項対立的な枠組みを取り外し、平和共存を目指すなどと主張するのはたやすいが、場所の問題を乗り越えてそれを実現することは容易ではない。『石の夢』の中心的な主題には、このような民族対立のアポリアを見つけ出すことができるのである。

5. 結論

本稿では、『石の夢』に関する諸事実を確認した上で、作品の根底をなす「劇場性」、及び「真理」の二つの主題を提示し、『石の夢』がフィクションであり、個人の探求を必然的に含むという、先行研究や社会での受容において見落とされていた事実を作品自体が強調していることを明らかにした。さらに、二つの主題の展開には、二項対立と場所の問題という民族対立につき

まとうアボリアが内在することを指摘した。

本稿は、大衆の受容や先行研究では、往々にして作品世界と現実世界、人物と作者などを同一視し、テキストから離れた「深読み」がなされてきたのに対し、『石の夢』という作品自体が強く訴える事象を汲み取る試みであった。その結果『石の夢』がフィクションであり、個人的な探求を含むという側面を強調したが、それは『石の夢』の現実的な意味や政治性を認めないことや、アイリスリの行為の偉大さを否定することを意味しない。ただ、政治的な議論をするにしても、『石の夢』が文学作品である以上、テキスト自体に沿って、現実と適切な距離をとる必要がある。また、「真偽」を基準に作品を「民族に対する裏切り」、あるいは「良心的なナラティヴ」などとして評価するにしても、必ずしもそれが作品の原義的な目標であるとは限らないこともまた、常に念頭に置く必要がある。『石の夢』に描かれているサドゥグリュイの悲劇は、まさに全てを政治的な物差しで測り、物事を民族対立の枠組み内へと還元させるような眼差しに起因するのだから。

本稿では、部分的にはアイリスリの諸作品に共通する問題系を土台に『石の夢』を考察したが、基本的には『石の夢』の基礎的な読解を提供すべく、作品自体の分析に重点を置いた。しかし、先行研究でも指摘されている通り、『石の夢』は作家の一貫した文学的探求の中に位置付けることが可能であり、決して突発的なものではない⁵⁷。また、議論を『石の夢』のテキストに絞ったとはいえ、狂気の問題やアバサリエフ医師、劇場支配人・モーパッサンの役割など、探求し切れていない問題ももちろん残っている。今後は『石の夢』のさらなる分析と、作家論的な研究や他の作品についての考察を行い、『石の夢』で展開された水平に拡張する「劇場」と、その地平にそびえ立つ「真理＝アイリス」の山という政治的、文学的風景が、より大きな絵図の中でどのように立ち上がってくるのか考察を広げる必要がある。

¹ Thomas De Waal, “Dreams in the ‘Black Garden,’” p. 41; Mikail Mamedov, “The Stone Dreams Scandal,” pp. 54–55. (注 18 参照) によると、アルメニアには類似の動きはほとんど見られない。

² Айлисли А. Каменные сны // Дружба народов. 2012. № 12. С. 13–69. なお、Айлисли А. Не ко времени весна: повести, рассказы, роман. СПб., 2013. С. 303–418. など、後の選集に収録されている『石の夢』は一部改変されているが、本稿では雑誌に掲載されている初版を参照する。

³ このジャンル名は、伝統的な小説の要求を満たさないことを示すものであるとされているが、具体的な意味は明らかにされていない。Akram Ayisli, *Farewell, Aylis*, pp. 291–292. (注 14 参照)

⁴ “Akram Ayisli: For Courage Shown in His Efforts to Reconcile Azerbaijani and Armenian People.” [https://static1.

squarespace.com/static/54132b01e4b0f5bf7ad3ed92/t/5c1006eb4ae237cb8aba875f/1544554219369/Aylisli+Nobel+nomination+letter.pdf] 以下、URL は 2021 年 1 月 27 日現在有効。

⁵ RFE/RL's Azerbaijani Service. "Azeri Author Sends Unpopular Message to Armenians: 'We Can Live Together.'" [https://www.rferl.org/a/armenia-azerbaijan-stone-dreams-akram-aylisli/24890815.html]

⁶ Ulvi Ismayil, "Sincerity, Truth and Mercy in Action," p. 65. (注 18 参照)

⁷ Гулиев Г. Азербайджанская литература: исторический очерк. Баку, 2010. С. 324–332.

⁸ Peter A. Orte, "Akram Aylisli," p. 2. (注 20 参照)

⁹ Mikail Mamedov, "The *Stone Dreams* Scandal," p. 43. Ulvi Ismayil, "Sincerity, Truth and Mercy in Action," p. 65. (注 18 参照)

¹⁰ アゼルバイジャン人の将校ラミル・サファロフは、NATO 主催の国際セミナーでアルメニア人将校を斧で惨殺し、終身刑の判決を受けるも、イルハム・アリエフ大統領に恩赦を与えられ、国民的なヒーローとなった。

¹¹ Распоряжение Президента Азербайджанской Республики о лишении Акрама Айлисли (Акрама Наджаф оглу Наибова) персональной пенсии Президента Азербайджанской Республики. [https://ru.president.az/articles/7230]

¹² Управление мусульман Кавказа осудило роман Акрама Айлисли «Каменные сны» // Бакинский рабочий. 14. 02. 2013.

¹³ 迫害をまとめた資料や報道は多いが、例えば、以下のサイトでは事件が時系列順に整理されている。Pen America. Akram Aylisli. Status: On Trial. [https://pen.org/advocacy-case/akram-aylisli/]

¹⁴ Akram Aylisli, (translated from the Russian by Kathrine E. Young) *Farewell, Aylis: a Non-Traditional Novel in Three Works* (Brighton, MA: Academic Studies Press, 2018).

¹⁵ この時間設定は、端的にいうと、アゼルバイジャン人によるアルメニア人虐殺である 1988 年の「スムガイット事件」と、1990 年 1 月の、同じくアゼルバイジャン人によるアルメニア人虐殺である「バクーボグロム」、及びそれに続くソ連軍の鎮圧「黒い一月事件」の中間にあたる。

¹⁶ Mikail Mamedov, "The *Stone Dreams* Scandal," pp. 46–47. (注 18 参照)

¹⁷ このような言説は多いが、例えば、*Орудж Ф.*, В лабиринте каменных снов // Бакинский рабочий. 19. 02. 2013.

¹⁸ 本論文で直接参照するものは、Thomas De Waal, "Dreams in the 'Black Garden': Literature and the Nagorno Karabakh Conflict," *Caucasus Survey* 2, no. 1–2 (2014), p. 41. Mikail Mamedov, "The *Stone Dreams* Scandal: the Nagorno Karabakh Conflict and Armenian-Azerbaijani Relations in Contemporary Literature," *Caucasus Survey* 2, no. 1–2 (2014), pp. 42–59. Ulvi Ismayil, "Sincerity, Truth and Mercy in Action: the Role of Akram Aylisli's *Stone Dreams* in Revisiting and Questioning Azerbaijanis' Views on Their Conflict with Armenians," *Caucasus Survey* 2, no. 1–2 (2014), pp. 64–71.

¹⁹ Andrew Wachtel, "Akram Aylisli: A Writer for His Time," in Akram Aylisli, *Farewell, Aylis: a Non-Traditional Novel in Three Works* (Brighton, MA: Academic Studies Press, 2018), pp. 302–309.

²⁰ Peter A. Orte, "Akram Aylisli, Village Prose, World Literature" (Master thesis, University of Oregon, 2019).

²¹ Аннинский Л. Неоплаканная боль // Дружба народов. 2012. № 2. [https://magazines.gorky.media/druzhba/2012/2/neoplakannaya-bol.html]

²² Anush Petrosyan, "Literature as a Platform for Dialogue in the Nagorno-Karabakh Conflict" (Bachelor thesis, American University of Armenia, 2019).

²³ Andrew Wachtel, "Akram Aylisli," p. 302.

²⁴ Peter A. Orte, "Akram Aylisli," では、「作家が人物の身なりで語る状態に最も近づく」部分に注目すると明言されており (p. 27)、その後の論考では、作家と登場人物が同一視されていると仮定しない限り理解し難い論理展開がいくつか見られる (pp. 30–32)。

²⁵ Peter A. Orte, “Akram Aylisli,” では、「今のアルメニア人はアゼルバイジャンの馬鹿な批判者と比べ、大してマシではない」という旨の登場人物の発言が、ナゴルノ・カラバフやアルメニアにおける暴力事件への言及とみなされていたり (p. 29)、ナゴルノ・カラバフを描いていない『石の夢』が「ナゴルノ・カラバフについての小説」とされている (p. 31)。

²⁶ Айлисли А. Каменные сны. С. 14.

²⁷ Там же. С. 19.

²⁸ Там же. С. 60–61.

²⁹ この人物の名前は明示されないが、アゼルバイジャンの歴史を当てはめた場合、ヘイダル・アリエフに他ならない。『石の夢』の舞台である 1989 年末のアゼルバイジャン共産党第一書記はヴェジロフであり、その前任者はバギロフである。しかし、国の「元主人」の任期が「十三年」(C. 52) であることや、「1979 年のアゼルバイジャンの最高権力者」(C. 20) であったことから、それは「国父」とも呼ばれる第 3 代目大統領ヘイダル・アリエフ (第一書記任期: 1969–1982) であることが明らかである。

³⁰ Айлисли А. Каменные сны. С. 55.

³¹ Там же. С. 56.

³² Там же. С. 56.

³³ Там же. С. 56.

³⁴ Там же. С. 60.

³⁵ 吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー：東京・盛り場の社会史』河出書房新社、2008 年、21–29 頁。

³⁶ 同上、22 頁。

³⁷ 同上、24 頁。

³⁸ 同上、24 頁。

³⁹ このことは、例えば、Аннинский Л. Неоплаканная боль. でも指摘されている。

⁴⁰ Айлисли А. Каменные сны. С. 57.

⁴¹ Там же. С. 31.

⁴² ニザーミー (岡田恵美子訳) 『ライラとマジヌーン』平凡社、1995 年、196 頁。

⁴³ Peter A. Orte, “Akram Aylisli,” p. 30.

⁴⁴ 堀内勝「砂漠の愛と詩の世界」板垣雄三編『世界の女性史 13 中東・アフリカ 1: 東方の輝き』評論社、1977 年、234–236 頁。

⁴⁵ 井筒俊彦『意味の深みへ：東洋哲学の水位』岩波書店、2019 年、239–241 頁。

⁴⁶ Айлисли А. Каменные сны. С. 51.

⁴⁷ Там же. С. 38.

⁴⁸ Там же. С. 30.

⁴⁹ Гулиев Г. Азербайджанская литература. С. 331.

⁵⁰ Айлисли А. Каменные сны. С. 43.

⁵¹ Там же. С. 46–47.

⁵² Там же. С. 59.

⁵³ Там же. С. 30.

⁵⁴ Там же. С. 32.

⁵⁵ Там же. С. 31.

⁵⁶ Там же. С. 57–58.

⁵⁷ Peter A. Orte, “Akram Aylisli,” pp. 11–12.

Проблемы бинарной оппозиции и места: Анализ литературных тем романа-реквиема «Каменные сны» Акрама Айлисли

Цуцуми Йорика

Между народами Азербайджана и Армении уже давно существует атмосфера коллективной ненависти и вражды. В такой обстановке бывший народный писатель Азербайджана Акрам Айлисли в своем романе «Каменные сны» выступил с критикой «армянофобии», глубоко укоренившейся в азербайджанском обществе.

Роман «Каменные сны» вызвал бурную реакцию в обществе, так как в этом произведении показываются острые ситуации, например, желание главного героя-азербайджанца отправиться в Эчмиадзин и молить Бога о прощении мусульман за зло, причиненное армянам. Из-за своего романа автор подвергается политическим преследованиям.

Несмотря на серьезность проблем, поставленных в романе «Каменные сны», он остается пока мало изучен. Большинство существующих исследований сосредоточено на таких внешних сторонах романа, как социально-политические отношения и литературные связи. Научная новизна работы заключается в детальном и всеобъемлющем литературном анализе текста. Цель исследования — достичь более глубокого понимания романа путем раскрытия его главных литературных тем.

В результате анализа выделены две основные литературные темы — драматургическая перспектива и «местная» истина. Во-первых, в романе показывается вездесущая «сцена», не позволяющая определить границу между сценой и реальностью. «Сцена» также функционирует как особое место, где ложь и правда одновременно существуют и не существуют. Во-вторых, упоминание об истории «Лейли и Меджнун» указывает на суфийское искание главным героем Истины. Однако для героя Истина, по идее трансцендентная, равна его родине, неизбежно имеющей индивидуальный и политический характер.

В обеих темах затрагиваются актуальные для межэтнического конфликта аспекты: проблема бинарной оппозиции и проблема места. В ходе развития этих тем также наблюдается своеобразный подход к постоянно преследующему автора вопросу «ложь и правда», что отличает «Каменные сны» от других произведений писателя. Таким образом, кроме политического характера, роман «Каменные сны» также занимает уникальное место в контексте литературных исканий автора.